



大きな声で祭文を読み上げるお稚児さんの代表

祭 満

復刊第二十二号

2014年 12月

身延別院発行

〒103-0001

東京都中央区

日本橋小伝馬町3-2

Tel 03-3661-3996

Fax 03-3663-2766

三年ぶりの稚児行列

お会式法要、百五十人の参列者でにぎわう

身延別院のお会式が十一月三日に営まれました。当院の檀信徒約百五十人が本堂に参列し、日蓮聖人に報恩感謝のお題目を唱えました。

お会式は、日蓮聖人がご入滅された十月十三日を中心に、全国各地の日蓮宗寺院、教会、結社で行われる法要です。今年で七百三十三回を数えました。

身延別院では毎年十一月三日・文化の日にお会式を行っています。たくさんのお檀信徒さんを迎えるために、お寺ではお会式に向けて万灯を準備したり、薄紙で作った花を本堂内に飾ったりと檀信徒さんの協力で会場づくりを進めてきました。今年も三年ぶりにお稚児さん行列が復活となりました。檀信徒の子どもさん、お孫さんら七人がお稚児さん行列に参加すると申し込みがありました。

お会式の当日、お稚児さんたちは彩りも鮮やかな衣装に身を包み、きれいに化粧をし、午後一時に家族とともにお寺の前を出発しました。小伝馬町交差点から本町三丁目交差点へ、そして再びお寺へと約八百メートルの道のりを、お題目と団扇太鼓の響きに合わせて練り歩きました。お稚児さんの姿は、地域の人たちからも注目されました。

本堂の前でお稚児さんとその家族が記念撮影を行い、引き続きお会式法要が本堂で厳かに営まれました。藤井住職が日蓮聖人の教えに対して感謝の言葉を述べました。参列者は法華経の自我介绍偈などを誦し、お題目を唱えました。お稚児さんの一人、小林朱莉さん(九歳)が参列者を代表して、日蓮聖人のご遺徳をしのぶ祭文を読み上げました。



妙福寺の境内。正面が妙見堂で、その左が本堂

御首題を いただく旅

第二十二回 千葉県匝瑳市・妙福寺

飯高檀林の前身のお寺

前回、二十一号の本欄で私は「(千か寺参りで)都内や関東地方の主だった寺院は訪ね終わってしまい、年を追うごとに遠方の寺院を訪ねる傾向が強まっています」と書きました。それは事実です。けれど「主だった寺院」とは何か、と言われると答えに窮してしまいます。何が「主だったお寺」で、何が「名もないお寺」なのか、基準はないからです。

「名もないお寺」など、一つもありません。日蓮宗のお寺の場合、過去の時代に、法華経の教えを広めようとする、強い意志を持った人がいたからこそ、そこにお寺ができたと言つてよいでしょう。ただ、時代が移り変わり、お寺の檀信徒さんが減ってしまい、無住のお寺になることも珍しくないのです。

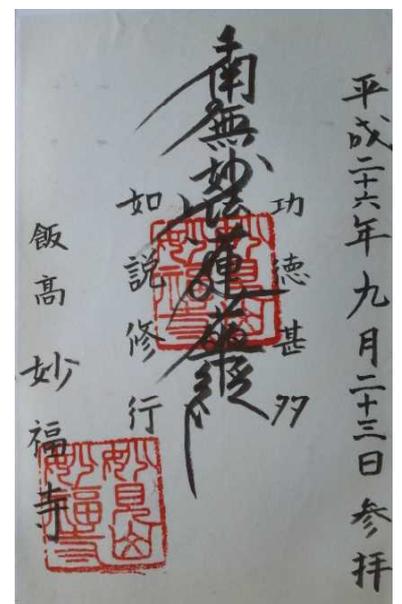
今回、ご紹介する妙見山妙福寺はご住職のおられるお寺です(無住ではありません)。山門を通つて参道を進んでいくと、やがて正面に妙見堂、その左手に本堂が見えてきます。背後を杉木立に囲まれ、本当に落ち着いた雰囲気のお寺でした。私が訪ねた時は、ご住職は法事のために外出中で、奥様が対応してくれました。時おり訪ねて来る参拝者のために、ご住職があらかじめ用意しているという御首題をいただくことができました。

奥様に尋ねると、すぐお隣に、飯高檀林の旧跡として名高い「飯高寺(はんこうじ)」というお

寺があつて、八日市場市の観光名所になっているとのことです。しかし、それ以外の日蓮宗寺院は、お寺の数はたくさんあるものの、無住であったり、お寺とは別の場所にご住職や家族が住んでいたりの場合が多いとのことでした。

確かに、飯高寺は有名です。本堂が国の重要文化財に指定されており、境内を使って町おこしのイベントなどがたびたび地元有志の手で開かれているようです。私も、平成十八年五月二十七日に参拝しました。

飯高寺に比べたら、妙福寺はこじんまりとした印象を受ける人が多いのかもしれませんが、隠れた名刹であり、味わい深いお寺と私は受け止めました。日蓮宗寺院大鑑を調べると、妙福寺は、「寛永十五年(一六三八年)三月十五日の創建。開山淨行院日祐。開基円成院日授。飯高檀林の前身で昌山(さかりやま)と称す」とありました。飯高檀林の前身だったのです。あまり知られていなくても、訪ねてみて初めて感動するお寺がある



副住職がインド龍宮寺創立十五周年法要に出仕



参拝者に対し、加持祈禱を行う副住職



遠方から見た龍宮寺本堂



団扇太鼓を練習する現地の子どもたち



全国日蓮宗青年会の青年僧たち

インド中西部のナグプール市にある妙海山龍宮寺で十一月四〜八日、創立十五周年記念法要が営まれ、当院の藤井教祥副住職が出仕しました。

龍宮寺は日蓮宗の篤信者・小川法子女史とインド人の熱心な仏教徒によって建立され、平成十一年十一月二十三日に盛大な落慶法要が営まれました。地上二階建て、間口十一間・奥行二十間、延べ四百坪という大きな本堂を持つ大寺院です。

今回、副住職は全国日蓮宗青年会社会教化担当委員長として出仕したものです。

副住職は十一月四日に成田を出発して德里に到着。五日は德里、アグラを観光し、ナグプールへ向かいました。そして六日に龍宮寺の十五周年記念法要を厳修しました。

現地では五千人を超える参拝者が集い、国境を越えて太鼓を叩きながらお題目を唱えました。

堂々とできたよ 祭文言上

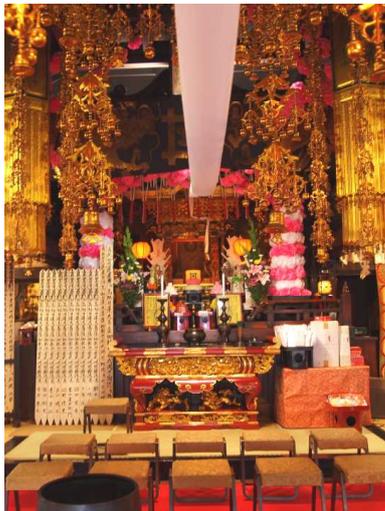


本堂前で記念撮影するお稚児さんと檀信徒の皆さん

当院の界限を練り歩くお稚児さん行列
(写真右)

発育・学徳増進のご祈禱を受けるお稚児さんたち
(写真下・右)

白い手綱が伸びる願満のお祖師さま
(写真下・左)



お会式 参列者から大きな拍手

お会式法要でお稚児さん行列が練り歩いたのは当院から本町三丁目交差点までの往復でしたが、行列の先頭から最後尾までが一体となつて歩むため、想像以上に時間がかかりました。沿

道の歩行者からは、あてやかな衣装をまとったかわいいお稚児さんたちに熱い視線が注がれていました。

お練りの後は、本堂での法要です。お稚児さんたちは最前列中央に並んで座り、発育増進、学徳増進の御祈禱を受けました。お稚児さん代表による祭文言上で、小林朱莉さんは、大きな

声で堂々と読むことができ、参列者からも大きな拍手がわき起こっていました。

法要の後は、地下ホールで供養が振る舞われました。お会式にたくさん奉納・ご供養をしてくださいました檀信徒の皆さま、本当に感謝しております。ありがとうございました。

寺の動き

青年会が縁結びの集い



良縁成就の御祈禱を受ける参加者たち

身延別院青年会は十一月二十九日、身延別院で「お寺で縁結びコン」を開きました。若者にお寺へ足を運んでもらい、お寺を縁にして、男女の縁を結ぼうという試みで、青年会が企画しました。今回で三回目となりました。前回、前回とカップルが誕生し、来年結婚が決まったカップルもいます。

今回は三十六歳までの男女十八人(男性九人、女性九人)が参加しました。青年会のメンバーが未婚の友人にチラシを配ったり、フェイブックで参加を呼びかけたりした結果、集まった皆さんです。

参加者は午後三時過ぎに当院地下に集合し、自己紹介をしてから数珠ブレスレットづくり挑戦。続いて本堂で良縁成就の御祈禱を受けました。このあと当院の檀家である若手漫才コンビ「ダブルスパム」が登場し、コントを披露。会場を笑いの渦に包んだ後、夕方からは当院近くのレストランで懇親会を開き、参加者は青年会スタッフと一緒にうちとけて語りました。若い世代にお寺へ足を運んでもらうために今後も青年会は縁結びコンを開いていきます。



数珠ブレスレットづくりに挑戦する参加者たち

豆入れ奉仕のお願い

来年の追儺式(節分の豆まき)で用いる豆の袋詰め作業を、一月十九(月)、二十(火)日に行います。七センチ四方ほどの小さなビニールの袋に、さかづきを使って豆を詰め、袋の口を折りたたみ、ホチキスで留めていく作業です。一時間でも二時間でも、都合のつく時間がかまいません。お手伝いいただける方、今回もどうぞよろしくお願いします。

秋季彼岸法要に五十人

身延別院の秋季彼岸会施餓鬼法要が九月二十六日午後一時から、本堂で営まれました。檀信徒約五十人が本堂に集い、提婆達多品などのお経を読みました。ご先祖をはじめ、ご縁のあった方々の塔婆をご供養しました。その後に住職から法話があり、終了後に地下ホールでご供養がありました。

べったら市、出店見送りました

毎年十月十九、二十日、東京・日本橋本町の宝田恵比寿神社を中心に開かれる「べったら市」に、今年は二年ぶりに身延別院青年会が店を出すと願満二十一号で伝えましたが、諸般の事情により、出店を見送りました。楽しみにされていた檀信徒の皆さん、次回にご期待ください。



花作りに参加していただいた皆さん

お会式の花作り奉仕

身延別院の檀信徒さん有志が十月二十、二十一日、本堂地下ホールでお会式の花作りに取り組みました。お会式では毎年、本堂の内外にピンクと白の薄紙で作った花をたくさん飾りつけます。その花をみんなで手分けして作り、竹や万灯にくくりつけます。二日間で作った花は、ピンクの花が約二千個、白が五百個でした。

お手伝いいただいたのは以下の皆さんです。阿久津一美・喜美子、石渡日出子、伊東精子、今井善子、岡本春雄・つね子、勝見登志子、小島喜恵子、小林聰子、鈴木秀子、寺久保トシ子、林好江、辻野幸子(敬称略)。ありがとうございました。

さまざまな御祈祷 お気軽に当院まで



お寺は法事をするところだけだと思いませんか。当院は願満のお祖師さまを祀っていることから、さまざまな願いの御祈祷を受け付けています。

十一月十五日には、檀家の藤田さんご家族が来院され、お孫さんの初参りをされました。当院の副住職がお孫さんの健やかな成長を願って発育増進の御祈祷を行いました。お孫さんは大きな声で泣き、また、大きな声で笑い、藤田さんご家族も当院も明るい空気に包まれました。このように当院では、「発育増進」に始まり、

「学徳増進」「寿命長久」「息災延命」「家内安全」「交通安全」「商売繁盛」など、皆さまのさまざまな願いに応じています。御祈祷の向きがありましたら、どうぞお気軽に当院までお声をおかけください。

今後の予定

十二月 一日(月) 願満祖師終日開帳

十三日(土) 十三日講法要並法話

午後一時より

二十日(土) 甲子 納めの大黒天祭

午後二時より

一月 一日(水) 三日(金)

太歳三ヶ日御祈祷、終日

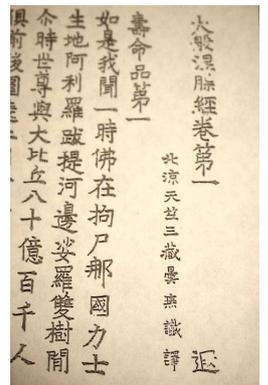
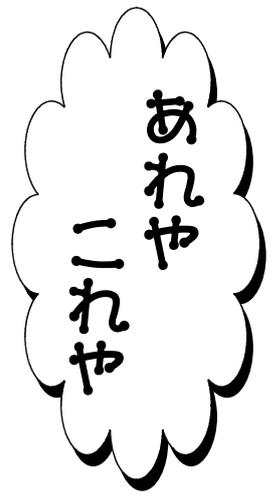
初旬 新春初詣団参 中山法華経

寺荒行堂ほか。詳細後日

編集後記

願満二十二号をお届けします。今回は三年ぶりに復活したお稚児さん行列を中心にお会式などを特集しました。お稚児さん代表・小林朱莉さんの祭文言上はとても上手だったそうです。私たち大人は子どもたちからたくさんのお元気をもらっています。来年のお会式でも、また別のお子さんが元気に祭文を読み上げてくれることを楽しみにしています。

(平山)



ユニークな訳経僧、曇無讖(どんむしん)

仏教はインドから中国へ伝わったが、その時中国にもたらされた經典論書は自国の言語、中国語に翻訳された。今日、私たちが読誦している『妙法蓮華經』などの經典は、梵本そのものでなく、漢訳された經典である。この漢訳作業は今日私たちが考える翻訳の概念と大分かけ離れている。だいたい一個人の仕事ではなく、それぞれの役割分担が決められて、大勢の人が関わる分業作業なのである。この漢訳事業については別の機会に説明するとして、本稿ではインドや中央アジアから中国へやってきて、仏典の漢訳に関わった訳経僧で、『法華經』の漢訳者、鳩摩羅什(くまらじゅう)に劣らずユニークな訳経僧、曇無讖(どんむしん、三八五・四三一、インド名はダルマスピンカ)を取り上げて紹介しよう。

曇無讖は中インドの出身。伝記は『出三藏記集』や『高僧伝』に現存するが、『魏書』「沮渠蒙遜伝(そきよもうそんでん)」中にも記載がある。それによると、六歳の時に父を喪い、母によって出家させられたが、十歳の時には経を誦すること一日一萬言、二十歳の時には大小乗の經典二百余萬言を誦したという。宗教的異能力があり、呪術を操ることに巧みだったという。

あることをきっかけに国王の寵愛を得た曇無讖は、呪術によってよく仕えたが、やがて王の寵愛が薄れると、呪術を悪用して王の歡心を買おうとした。これが王の知るところとなり、彼は捕らえられた。しかし処刑前に逃亡し、『涅槃經』などの經典類を携えて、北方カシミールへ、

そして龜茲(クッチャ)、鄯善(ロプノル)と、シルクロードを東行し、敦煌に数年留まった後、やがて涼州姑蔵(中国甘肅省武威)に入った。これが西暦四一二年のころという。

同じころ、姑蔵を平定して河西王を称した北涼の沮渠蒙遜は、さらに西涼、酒泉と兵を進めて敦煌を攻め、河西回廊を制圧した。この蒙遜の目に止まったのが曇無讖である。当時彼の呪術の名声は西域中に聞こえ、人々から大呪師と呼ばれていた。蒙遜はそのような曇無讖の呪術能力を買って国師として迎えたのだ。蒙遜は別な伝によると、残忍、淫乱の暴君とあるが、仏典の翻訳事業は積極的に推進した。この蒙遜の下で經典翻訳に勤しんだのが曇無讖である。

彼の訳出經典は十一部百十七卷、その中でも最も重要なものが『大般涅槃經』四十卷である。この經は『法華經』などと同じく大乘仏典に属し、東アジア漢字文化圏の中で極めて大きな影響力を持った。「一切衆生に悉く仏性(ぶつししょう)有り」と説いて、誰もが等しく仏になる可能性があると説いたからである。この『涅槃經』が東アジア仏教の大乗化に果たした役割には極めて大きいものがあった。

ところで、十年の余、蒙遜に仕えた曇無讖は僧侶らしからぬ悲劇的な最期を迎える。『涅槃經』の梵本の不足分を西域に求めようと出発した旅の途中、彼は蒙遜が放った刺客によって暗殺されたのである。折しも大呪師の名声を聞いた北魏の太武帝が曇無讖を国師として望んでおり、経を求めての旅が北魏への逃避行と蒙遜に誤解されたためであった。

後世、曇無讖については毀誉相半ばするエピソードのために、その実態はなかなか捉えがたい。前述の『魏書』「沮渠蒙遜伝」では、彼が鄯善から涼州へ移ったのは鄯善王の妹と私通したのが発覚して逃げたのだといい、さらに蒙遜の下では婦女子に男女交接の術を授けたために後宮の女性が皆彼の処に赴いた、と散々な書きようである。

しかし、一方では中国の沙門に菩薩戒を授けるのに極めて厳格な修行を要求したという逸話も残っており、彼ほど毀誉褒貶の激しい訳経僧も珍しい。曇無讖の場合、人並はずれたその宗教的異能力が身を滅ぼしたというべきかもしれない。